

日大ボクシング部・梅下新介監督に聞く／BOX

2016.4.29 09:56

「王者・日大」「常勝・日大」「赤い軍団・日大」。関東大学ボクシングリーグ戦関係者にとって、「日大ボクシング部」は特別な存在だ。圧倒的な強さを誇り、過去68回開催されたリーグ戦の中で、11連覇を含む合計29回の優勝。数多くのオリンピック日本代表、全日本チャンピオンを輩出。アマチュアボクシング界の頂点に君臨する日大ボクシング部を率いる梅下新介監督に、5月14日(土)に開幕する第69回関東大学ボクシングリーグ戦について話を聞いた。(岩崎仁)

——今年の目標は

梅下新介監督「優勝、3連覇である。毎年、毎年が勝負だ。去年は8年ぶりに2連覇をした。優勝から遠ざかった7年間に、変えてはいけないもの、変えなければいけないものがあり、積み重ねたものが今、花開いたと思っている」

——日大の圧倒的な強さの秘訣は

「合宿所生活だ。挨拶、規律、すべてを学ぶ。負けて後悔するなら普段から律していく。4年生はリーダーシップを、3年生は4年生の支えを、2年生は1年生を引っ張るとともに3年生のフォローを、1年生は上級生に食らいついていく。朝から晩まで苦楽を共にし、同じ釜の飯を食べて、チームワークを作り上げる」

「後悔しないために、練習に勝るものはない。毎朝6時から2時間、マスボクシング、実戦練習がメインの朝練。夕方17時からロードワーク10キロ、サンドバック、鉄アレイを持ったシャドーボクシングをメインに2時間程度練習。大学の授業がある部員は、授業を優先し、授業が終了してから練習に参加する。メニュー内容は同じである」

「2月上旬から4月上旬は合宿練習であり、朝は3時間半、夕方は3時間半の練習。各自、責任を持ち、自ら厳しい練習に耐える」

「合宿所生活での食事、約40人分も部員が自ら料理する。月に1回ほどの当番、2人がペアとなり、大学の授業のない部員が、他の部員が朝練をしている間に食事の用意をする。料理をするのも学びである。夕食当番は朝食当番とは別のペアで授業のない部員が、他の部員が練習している間に料理をする」

——ライバルは

「自分自身である」

——チームの雰囲気、日常生活は

「毎日、練習時に苦しい中でも円陣を組み、大きな声を出す。継続は力なりだ。部員は厳しい練習をともに乗り越えている団結力がある」

「全員が選手であり、皆で助け合う。リーグ戦のメンバーは普段の練習と、全日本選手権等で活躍する部員を選んでいる」

「また、学生として学び、文武両道を重んじている」

——チームのキーマンは

「主将の小林将也(新潟北)だ。今までの実績と強いリーダーシップ、普段の生活態度もしっかりしている」

——高校生のスカウト体制について

「高校の先生と情報交換をし、全国各地から学生を集めている。即戦力となる学生や大学で伸びるタイプなど、タイプは様々だ」

——学生時代にボクシングに取り組む学生に対して

「普段は部員を褒めないが、今、この時代に、一つのことに打ち込んで厳しい合宿所生活を過ごす部員を誇りに思っている。なかなかできることではない」

——監督にとっての関東大学ボクシングリーグ戦とは

「日大ボクシング部を背負っての責任。OBに対して責任。現役の選手に対して責任。これから日大ボクシング部に入る学生への責任」

日本大学ボクシング部

1928年創部。関東大学ボクシングリーグ戦優勝29回。オリンピック日本代表多数輩出、全日本チャンピオン多数輩出。プロボクシング元WBA世界スーパーウェルター級王者・三原正、元OPBF東洋太平洋ミドル級王者・佐藤幸治はOB。

梅下新介監督

1974年8月8日生まれ、香川県・高松商業高等学校出身。大学時代4年間と卒業後のコーチ時代7年間、合計11年間でリーグ戦11連覇を経験。監督として10年間の間にリーグ戦3回優勝。